

「霧月」の屋根



季節を映す庭園、和の粋を極めた数寄屋建築
五十鈴川畔の別天地、神宮茶室で

一期一会の特別な朝を



一ノ間と二ノ間の境にある欄間に、若松の意匠が彫り抜かれている。



貴人玄関から望む表庭。木立の向こうに参者で賑わう参道があるとは思えない静けさ。

三庭に臨む真、行、草、の和空間

参道を離れ、小径を入っていくと、せらぎに小さな石橋が架かっています。この石橋を渡った先が、神宮茶室の敷地となります。

白竹をめぐらせた表門をくぐると玉砂利を敷き詰めた中庭があり、正面に玄関へつながる「渡り」が設けられています。

参道を離れ、小径を入っていくと、せらぎに小さな石橋が架かっています。この石橋を渡った先が、神宮茶室の敷地となります。

財界のトップであった松下氏は、茶の湯など日本文化への造詣が深く、日本人の精神文化の向上を願って全国に十の茶室を献納されました。最後の一棟となった神宮茶室の建築に当たっては、「三十年先まで保ち、歴史的遺産となるものを」とつくり手に要望されたそうです。

設計を担つたのは「株式会社アートスタヂオ」、施工は「中村外二工務店」です。いずれも、日本を代表する数寄屋建築のスペシャリストで、使う木材は各地から吟味したものを数年かけて乾燥させ、本建築の前に現地に原寸大の模型を作り、軒の高さや木立との関係、材の收まり具合などを綿密に確認するという手間のかげようでした。

れる一画があり、木立の間から控えめな鬼瓦が見えています。ここに、緑に抱かれるようにして神宮茶室が建っています。

当時の伊勢神宮崇敬会会長であった故松下幸之助氏のご発意で、松下電器産業株式会社グループにより献納されたもので、昭和六十年の四月に竣工し、二十年余を経た今なお、気品に満ちたすがすがしい姿を保ちつづけています。

宇治橋を渡つて大鳥居をくぐると、右手に御正宮への表参道がつづきますが、左手には広葉樹に覆われた紅葉山と称さ

松下幸之助氏の發意で献納

月を感じ、新しい月の無事を祈る朔日参りは、伊勢ならではの美風です。月のはじめの早朝、神前に手を合わせ、お神樂を奉納した後、神宮茶室にて呈茶と拝観のみ。季節を映す庭園の美しさ、銘木と土壁の風情、柱や天井、建具などの造作にうかがえる匠の息吹…。当会行事ならではの、和敬清寂のひとときを、ぜひご体験ください。

今回の特集では、知られざる神宮茶室の魅力をご案内しましょう。

天照大御神様へ、無事に過ごしたひと月を感謝し、新しい月の無事を祈る朔日

参りは、伊勢ならではの美風です。月のはじめの早朝、神前に手を合わせ、お神樂を奉納した後、神宮茶室にて呈茶と拝観のみ。季節を映す庭園の美しさ、銘木と土壁の風情、柱や天井、建具などの造作にうかがえる匠の息吹…。当会行事ならではの、和敬清寂のひとときを、ぜひご体験ください。

日本を代表する数寄屋建築を間近で

見る機会は、普段は春と秋の神樂祭の庭上拝観のみ。季節を映す庭園の美しさ、

銘木と土壁の風情、柱や天井、建具などの造作にうかがえる匠の息吹…。当会行

事ならではの、和敬清寂のひとときを、ぜひご体験ください。



せせらぎから格調高い上座間をみる。

また露地には、大腰掛待合が、霽月を眺めるように佇んでいます。

一期一会のありがたさを知る

茶道は、日本が世界に誇る精神文化です。一服のお茶を点てたり、お点前をいただ

くのは、単に作法のやり取りではなく、お互いへの思いやりや感謝といった、高度に洗練された対話にほかなりません。

季節を映す庭、茶室の造作や茶碗との触れ合いは、自然の恵みである木や土が、それぞれのつくり手と出会い、心をこめて形づくられたからこそ、今このひとときがあ

また露地には、大腰掛待合が、霽月を眺めるように佇んでいます。



池上にせり出した書院、上座間広縁から表庭を望む。床は赤松の幅広板。軒天には北山小丸太の垂木が整然と並ぶ。新緑、紅葉の季節の美しさは格別。

呈茶が終わると、神宮職員により、露地をひとめぐりする庭上拝観が案内される。

茶室の源流である「霽月」には、躰り口、刀掛けなど、四畳半の空間に茶道の精神が凝縮されている。
(上段右から)

大腰掛待合から眺める茶庭と霽月。上段の間に高い入母屋根と直角に、霽月の低い柿葺き屋根がつながる。棟上には飾り瓦が葺かれ、先端にはカエス型の鬼瓦が据わる。(右)



中門をくぐって玄関へ。玄関奥には三和土ではなく、温かみのある信楽焼の陶板を四半敷きに。末広の縁起を持つ八角形の飾り窓も設えられ、障子越しにやわらかな外光を招き入れています。鞍馬の沓脱石を踏んで上がる、畳敷きの回廊が延びています。

貴賓専用の通路、玄関を持つ「真」は、格調高い書院風の上段の間で、屋根は檜皮葺の入母屋。池畔の外周には板張りの広縁がめぐらされ、水上から庭を眺めることができます。

玄関に近い切妻屋根の「行」は二間づきの広間で、一ノ間の床には慶光院俊元神宮大宮司による「敬神」の軸が掛けられ、二ノ間との境の欄間にには若松の模様が刻まれています。お呈茶は一ノ間をお借りして行われます。

最奥が「草」で、躰り口のある四畳半席となつており、鷹司和子元神宮祭主が「霽月」(せいげつ)と名付けられ、入江相政元侍従長の揮毫による扁額が、柿葺きの破風下に掲げられ、侘びた草庵の雰囲気をかもしています。

霽月とは、雨上がりの月のこと。くもりのないさっぱりとした心境を例える言葉で、神宮茶室の根本精神は霽月に集約されているといえるでしょう。

るのだという「二期一会」のありがたさを再認識させてくれます。

忙しい消費社会のなかで、時には立ち止まってじっくりと生き方を見つめ直す。朔日参りでのお神樂、お呈茶を、そんな機会にしていただければ幸いです。